

トピックス

1. 播州日誌「残念ながら…」

2. 社労士への道 第12回「天職」



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 44

2021年8月号

立秋～処暑の候 小さな秋をみつける喜び

この原稿を書いている数日前、7月19日頃ウォーキングの途中ストレッチをしている天川東公園の一角で、今年初めて蝉が鳴くのを聞いた。ミーンミーンと騒がしいが蝉の命の短さを思うとここを先途と鳴く声に声援を送りたい気持ちにもなる。毎年のことである、どうも段々その鳴き声が小さく弱くなってきているような気がする。気のせいかもしれないけれど。

うだるような暑さの7月を過ぎて8月迎える。炎天下の中で立秋と言われてもピンとこないが、とりあえず暦の上ではこれから立冬までを秋と言う。夏から秋へ季節が行き合う頃、大自然の中で様々な演出が見られる。風や雲や草花がいろいろな場所で変化を見せ始める。小さな秋を見つけては心嬉しい気持ちになる。無機質なデジタルの世界にはない優しきや愛しきがある。涼しげな一陣の風に心震えるほどの喜びを感じる。四季折々の風情が日本の文化をより繊細で柔らかく、床しく健気なものにした。暦の上での季節は1ヵ月ほどずれてしまうが、まあかたいことは言わず暑さに閉口しながらも小さな秋を見つけて毎日を過ごそう。いつの間にかワクチン接種率もかなりの数字になってきた。もう少し、もう少しの繰り返し。コロナ禍が1日も早く過去の話になりますように。祈るばかり…。



※立秋 8月7日頃

※処暑 8月23日頃

随筆 『龍馬と私』 ～ 薩長同盟（1）～

前号の「海援隊」の話から歴史の針を少し戻してみたいと思う。

薩長同盟は慶応2年（1866）1月に締結される。その前兆となったのが文久3年（1863）8月18日の政変といわれている。倒幕派の長州、薩摩両藩と佐幕派の会津藩との3角関係で事が発する。同じ倒幕派でも長州藩は王制復古・天皇親政による倒幕を、薩摩藩は公武合体による倒幕を目指し、会津藩は公武合体による佐幕体制の維持を考えていた。当然、長州と会津は対立することになる。同じ倒幕でも薩摩は先鋭的な長州の動きを封ずる為に会津と手を結び長州を政局から排除する行動に出た。これが8.18の政変である。

翌年には、武装上京した長州軍が御所に向けて進軍し蛤御門をはじめ、御所各門を攻撃。薩摩会津の守護陣と戦闘する事になり、敗走した長州はこの時より朝敵となる。幕府は長州征討の軍を進めるが途中で断念。うまくいかない。長州藩内では高杉晋作らが上層部の弱腰に反発して、不穏な動きを見せ、幕府は第2次征討を企画し長州藩も対決姿勢を崩さなかった。蛤御門の変により薩長は犬猿の仲となる。

薩摩藩の庇護下にあった龍馬は同じ倒幕を目指す薩長が手を結ぶことが維新回天にとって不可欠の事であると考え、仲介の労を取る。志を同じくする中岡慎太郎や土方久元らと手分けをして西郷と木戸の面談実現の為、奔走する。中岡が西郷を、龍馬が桂を説得して会談の運びとなる。しかし西郷の変心により一度は絶望的に。龍馬は一計を案じ薩摩藩名義で長州藩の軍艦や武器を購入するという事態打開策を提示。この時亀山社中を使う。京都に居た西郷を更に説得。長州藩も軟化し桂らは京へ向かう。慶応2年（1866）1月8日、伏見に到着した桂らを西郷自ら出迎えている。



中岡慎太郎
1838年～1867年

長州藩は桂小五郎 大久保一臈 小松帯刀 桂久武ら数十人。西郷の屋敷で数日を過ごしたが、双方から同盟の話は出ず、いたずらに日を過ごすばかり。薩摩藩は困っている長州藩から言い出すのがあたり前だと主張し、長州藩としては天下を敵としており、長州藩から口を開けばそれは薩摩藩に援助を求める事になり武士として恥ずべき事であった。まあ、意地のぶつかり合いというしかない。きっかけを失ったまま両藩とも龍馬の到着を待つ事になってしまった。

播州日誌

「残念ながら…」



大相撲名古屋場所は1年6場所を休場しその休場明けの白鵬の全勝優勝で幕を閉じた。快拳と言うべきだが残念乍ら…。本当に残念ながら白鵬の復活を手放しで喜べない。それは場所後のマスコミでも取りあげ、協会理事長から嚴重注意もあったと聞いている。

優勝をかけた大関照の富士との対戦。なりふり構わぬ白鵬の相撲に批判が集中。まず張り出して機先を制した後、右肘を使ってのカウンターパンチ、これが見事に決まり照の富士の顔が歪む。その後さらに右、左と張り手。もうまるで喧嘩だ。照の富士も堪えきれずに張り手で応酬。百戦練磨の白鵬はこれを待っていたかのように甘くなった脇から手を差し入れて右四つ。不利を察してか、強引に小手投げを連発し体を寄せる。これで勝負がついた。両力士の死力を尽くした見事な1番ではあった。勝利の瞬間、白鵬は雄たけびをあげて大きくガッツポーズ。教会から何度注意されてもこの横綱は反省せず慎むような気配がない。勝つためには手段を選ばないし、強ければそれで良いと言う傲慢さ。それは日本人が横綱に望む品のある所作ではなく、この千秋楽の結びの1番に違和感を持った人も多いと思う。日本の相撲は本来神に奉納する「神事」を起源とする。従って土俵は神聖なものであり今でもかたくなに女人禁制を守っている。その俵で囲われた場所は、神の居場所を表す結界であるとされる。それに白鵬は両足を乗せて足の裏の砂を落とすのである。日本人の力士は全体にしないことである。白鵬だけが悪いわけではない。その偉大すぎる実績と協会への貢献の大きさから、親方自身がそれを教育指導することさえできない。繰り返される嚴重注意も本人にとっては馬耳東風。時間が経てば忘れてしまう。白鵬が日本国籍を取り、親方として協会役員になる頃には、大相撲の伝統と格式はずたずたになり、日本古来の伝統である「相撲道」も歴史の中に埋没してしまうことだろう。残念ながら…。



もう一つ残念なこと。何よりも日本人力士の不甲斐なさ。大関貴景勝は途中休場、朝の山は不祥事で1年間出場禁止で大関陥落。両膝の故障と内臓疾患で大関から序二段まで番付を下げた後、復活した照の富士が準優勝で場所後、横綱に昇進。まさに快拳だが、この力士もモンゴル出身。モンゴル人の為のモンゴル大相撲がこれからも続く。残念ながら…。

2021.7.18

「三島での下宿生活」

社労士への道の原稿を書いている「天職」の話から私の青春時代の話に筆が滑ってしまった。当時私は18歳。明日は上京という日の前夜。父は私を呼んで前に座らせ、しばらく沈黙した後、息をつまらせてこう言った。「章よ、すまん、お金これだけしかない、がまんしてくれ。後はまた送金するから」と言って涙を流した。6人兄弟の下から2番目。自転車屋やクリーニング店。自営業だった父の収入は不安定で、金があるかと思えばなかったりした。もち論なかった事が多い。ノータンキな私は授業料の事など余り深く考えてなかった。バイトでもすれば何とかなると信じていた。だから大きな期待はしていなかったが、生活費として1ヵ月もつかもたないかの金額ではあった。下宿代が1ヵ月朝・夕食付で20,000円という破格の安さであった事が何より幸いであった。この時の約束の後から送るは勿論、空約束だった。母から毎月最低の金額が届いた。2食付きだったので食べるのに困る事はなかったが、下宿代が遅延するのが一番痛かった。一度も催促される事はなかったが。さだまさしの歌で「案山子」という名曲がある。母親の真情を歌ったものだが文字通り私にとっての現実であった。まずありったけの10円玉を用意する。赤電話にそれを連続投入する。高知への電話。「章やけどお金頼む」と絶叫する。10円玉がカチンカチンと消えていく。母親も必死で「元気かね」と話しかけてくるが、いつも途中で途切れてしまう。「金送れの一言葉でもいい」と歌詞にあるがこちらは本当に絶叫しかない「お金送って・・・」。そんな有様ではあったが三島での下宿生活はバイト、バイトで乗り切った。今はそれもかけがえのない青春の思い出。

2021.7.21

「それでも開催された東京五輪」

多くの反対の声をかき消すようにして不安と心配の中で東京五輪が開幕した。私は人命を犠牲にするかもしれない五輪開催には反対してきた。アスリートにとってはとてつもなく大きな負担となり、失望となることを理解した上での反対だった。案の定、しらけた開会式になった。無観客でもあり一向に盛り上がらない。「どんな顔をして迎えたら良いのか」と神戸新聞のコラム五輪記で作家高村薫氏が述べている。続発した不祥事は多くの国民の鬱鬱を買ったし、世界の笑いものになってしまった。盛り上がりには欠けたと言う報道が多かったが、それは当たり前だと思う。世論の動向を全く無視した開催なのだから。「安心と安全」を繰り返しその具体策を言わない首相の説得力のなさを国民は痛感した。

平和の祭典であったオリンピックが実はIOCと政治家、各スポーツ団体、そしてスポンサー企業のためのものであることを今や知らない人はいない。競技が始まり多くの感動が日本中を揺り動かした。連日アスリートたちの激闘に手に汗握り、勝利の瞬間、多くの人が涙をこらえきれなかった。ただ一方で東京のコロナ感染が急上昇し、医療崩壊の恐れも出てきた。選手たちの健闘にも拍手を送りつつ、犠牲者の出ないことを心から祈る毎日である。7月28日全国の感染者数過去最大の9583人。感染の第5波は確実にやってきた。

2021.7.28



「社労士への道」

第12回 「天職」

転職とは、天から授けられた仕事と言う意味。人生の中で天職に恵まれる人は稀で、多くの人は天職にありつけず、中途半端な人生を歩むことになる。心のそこから天職と思える事は何より幸せなことだ。子供の頃から母方の血筋に教育者がいたことから学校の先生、国語か社会の先生になりたいと思っていた時期がある。しかしそのために勉強をしたかというところでもなく、高校時代にNHKで放送されていた「事件記者」を見て、今度は新聞記者になりたいとの思いが強くなった。「事件記者」は社会部で警察署記者クラブでの抜きつ抜かれつの特ダネ争奪戦。毎回絶妙なコンビネーションで他社を抜いてしまう。また反対に他社に出し抜かれてしまう。そのボケとツッコミが面白く、記者クラブに詰める記者になりたいなと真剣に考えたものだ。3年生の時進路指導の先生に明治学院大学の文芸科、日本大学の芸術学部など勧められたがその気になれず、当時新聞学科があった同志社大学か日本大学の法学部新聞学科を受験することにしたが結局学力的なもの(特に英語が苦手だった)と東京への憧れとで日本大学を選択し、準特待生扱い、特待生としては認めないが入学を認めると言う一寸変わった合格の仕方ではあったが無事に入学となった。たいして受験勉強もせず、受験したのも日大だけと言う変わった受験生だった。一回生は予科として静岡県三島市で過ごす。日大はマンモス校だったので西日本からの入学者は1年間、三島分校に通うことになる。農家が現金収入を得るため、下宿屋を営んでいることが多く、学校からの斡旋でとある下宿屋に住むことになる。同時期13名のいわば寮仲間と過ごすことになる。その時みんなから^{ぶんや}闇屋とあだ名で呼ばれていた。闇屋とは辞書にはない業者言葉で新聞記者のことである。1年間はこの仲間たちと飲み、歌い、騒ぎ、徹夜で話し込んだり、伊豆地方を旅行したりと青春真っ只中を生きた。真面目に授業にも出たが、アルバイトもした。隣町である沼津の西武百貨店のビアホールでのバイトは面白いことばかりだった。おかまのおじさんに付きまといわれたり、客が残した(女性客は口をつけずに残すことも多い)ぬるくなったビールを盗み飲みしたり、とにかく腹が減っているので客が残した食べ物で栄養補給した。大ジョッキ5杯を両手で持ち、客のテーブル付近でつまずいて客にビールを浴びせてクビになったやつもいた。幸運にも私の悪業は1度も露見せず、最後まで首はつながっていた。その後の大学生活も本当に貧乏学生でバイトに次ぐバイトでその数は軽く両手の指を超える。その一つ一つがしかし今となっては青春の形見であり、その経験は今の社労士の仕事にも活かされている。



高砂の宝殿中学校で進路指導の一環として毎年行われている。「働くということ」というセミナー。その講師の1人として出席し、この「天職」の話をした。生徒から「天職を見つけるにはどうしたら良いのですか。」との質問。私はこう答えた。「転職を得るには、常に自分の全力を尽くして、人のため世のためになることを考え行動すること」。きらきらと輝く夢一杯の生徒達。デジタル化の時代、彼らの就業環境はどうなっていくのだろう。そういった環境の中で「天職」をみつける事はさらに困難なことかもしれない。

夏季休業のお知らせ

8月12日(木)～8月16日(月)です。

なお労災等、緊急の場合には、090-1961-9588(先生直通)までご連絡ください。